

障害者施設実習に対する不安

—不安の因子構造および不安と経験との関係—

倉 本 義 則

(児童学科准教授)

I はじめに

保育士資格の取得に際しては保育実習が義務づけられており、保育実習は保育所での実習（以下、「保育所実習」という。）と、保育所以外の児童福祉施設または知的障害者施設等での実習（以下、「施設実習」という。）が必要とされている。一方で、資格取得を希望し、初めて実習を経験する学生は、実習に対してさまざまな不安やストレスを感じていることがしばしば指摘されており、中には、精神的、身体的不調に至り、実習を中断する者もいるという。こうした現状を背景に、実習に対する不安について研究が行われてきた。特に、保育所実習に対する学生の不安については、因子分析により、その構造を分析した研究がいくつかみられる。たとえば、長谷部（2007）は実習前の不安感について、指導案の作成、部分・全日実習の計画・遂行などに関する不安である「指導」の因子、保育現場や子どもの発達・基本的指導についての事前学習の不足に関する不安である「事前理解」の因子、子どもや実習園の指導者との人間関係に関する不安である「人間関係」の因子、保育技術を含む実際の具体的な実習活動に関する不安である「活動内容」の4因子を指摘している。また、高橋ら（2007）は「子どもとのコミュニケーションに関する不安」、「保育士としての役割に関する不安」、「実習環境や内容に関する不安」の3因子構造をなすと指摘した。さらに、原（2006）は、子ども、親、実習園の保育士との関わり方、接し方についての不安である「対人関係」、部分実習や責任実習を行うことやその準備に関する不安である「部分・責

任実習」、実習日誌を書くこと、紙芝居、絵本の読み聞かせなどに関する不安を含む「日誌および実習内容」、ピアノの演奏に関する不安である「ピアノ」の4因子構造を指摘している。また、保育、教育、福祉、看護、医療におけるさまざまな実習に関する不安の特徴を整理し、実習に関する不安は一般的な意味での不安（つまり、漠然として対象のはっきりしない不快や恐れ感情）とは異なり、実習で行われる内容に限定される固有の不安が含まれていることや、実習で関わる人たちをめぐる対人関係に関する不安が、分野を問わず存在する、と指摘している。

このように、保育所実習に対する不安は、対象となる児童あるいは保育所で働く保育士等の職員との人間関係、実習生に課せられる役割や持つべき技能（部分実習等を任せられること、日誌を書くこと、紙芝居などの実習活動そのものなど）、あるいはその準備や知識（子どもの発達や保育現場に関する理解・知識など）に関する不安が中心であるとされている。

また、教育実習のうち、幼稚園で行われる実習に関しても、実習不安の構造の分析が行われている。たとえば、杉山（2002）は実習記録簿をつけることや言葉遣い、保護者への対応などの「接遇・マナーなどの社会的コミュニケーションに関する因子」、「対園児コミュニケーションに関する不安」、「体調維持に関する不安」の因子を指摘している。また、碓氷（2006）は子どもの状況に応じた保育を行うなどの「子どもたちへの支援の仕方に関する不安」、「担任との関係及び体調管理に関する不安」、「記録を書

くことに関する不安」,「準備の内容に関する不安」,「子どもたちとの関わりに関する不安」の各因子を指摘している。このように,保育所実習の場合と類似した不安が指摘されている。

一方,施設実習については,田中ら(1994)による保育所以外の児童福祉施設を中心とした施設実習における実習前の不安についての研究がある。それによると,子どもとの人間関係,宿泊実習そのものへの不安,施設を知らないことからくる不安が多く,次いで施設児への嫌悪感や恐怖感,体力的な不安,保育士業務への不安,職員との人間関係の不安などを挙げる学生が多かったことが報告されている。しかし,施設実習の実習前の不安に関する研究は乏しく,不安の構造に言及したものはみあたらない。さらに,施設実習先の一つに位置づけられている障害者施設で実習を行う場合の不安については,取り上げられることがほとんどない。障害者施設での施設実習(以下,「障害者施設実習」という。)は,実習において関わりをもつ対象が障害のある成人であること,一般に,宿泊実習という形態をとることなど,保育所実習とは異なる面があり,実習に対する不安も違ったものとなる可能性がある。

以上のことを踏まえ,本研究では主に次の点を明らかにすることを目的とした。

1. 保育士養成に係る障害者施設実習の不安の構造を明らかにすること,および保育所実習における不安の構造との異同を明らかにすること。
2. 障害者施設実習は障害者施設において障害者と関わる実習であることを踏まえ,障害者と関わった過去の経験等と実習における不安との関係を分析すること。

なお,保育所以外の児童福祉施設等で働く保育士(「施設保育士」)への関心の強さと不安との関連についても,あわせて検討を行う。

Ⅱ 方法

1. 調査対象

保育士資格取得を希望する本学児童学科学生で,全て女性である。調査年度及び学年は,

2006年が2年生91名,3年生2名の計95名,2007年度が2年生92名,3年生9名の101名であり,計196名を対象とした。なお,両年度とも調査同年8~9月に,学生にとっては初めての实習である保育所実習を体験している。

2. 調査時期

2006年11月,2007年10月。施設実習の2~3ヶ月前の時期である。施設実習オリエンテーションの時間に,施設実習の概要を説明した上で実施した。なお,調査時点では学生に実習先の施設は通知されておらず,知的障害者施設等で実習を受けることを前提として回答を求めた。

3. 調査項目

- (1)「障害者施設実習に対する不安」に関する質問項目

調査年次以前に行われた障害者施設実習の事前事後指導において学生からあげられた不安を参考に,23項目を設定した。回答は7件法で求め,回答結果は「1. 全く心配はない」~「7. 非常に心配である」に1~7点を配点し,分析に用いる。

また,23項目以外で不安に思うことについては,自由記述欄に記述するよう求めた。

- (2)「障害児・者との関わり等の経験」に関する質問項目

障害者観^{3),4)}に関する研究を参考に,日常生活の場面での経験,学校生活などでの交流の経験,ボランティアの経験,TV等の視聴による間接的な関わりの経験のほか,ネガティブ場面の体験,ポジティブな場面の体験の有無や程度を問う8項目を設定した。回答は5件法で求め,回答結果は「1. 全くない」~「7. よくある」を1~5点に得点化し,分析に用いる。

- (3)「施設保育士の希望」に関する質問項目

障害児施設等で働く「施設保育士」をどの程度希望するかについて尋ねる項目である。回答は5件法で求め,回答結果は「1. 全く関心がない」~「5. 関心がある」を1~5点に得点化し,分析に用いる。

Table 1 「施設実習に対する不安」の質問項目の平均と標準偏差

(N = 172)

	質 問 項 目	M	S.D
Q 1_1	利用者のやりたいこと、やりたくないことなどの意思を把握すること	5.512	0.868
Q 1_2	利用者に対する食事や更衣などの生活上の世話をすること	5.628	0.974
Q 1_3	利用者と一緒に余暇時間を過ごすこと	4.558	1.191
Q 1_4	利用者に対して、してほしいことを指示すること	5.250	0.944
Q 1_5	利用者に対して、してはいけないことを注意すること	5.564	1.027
Q 1_6	利用者と仲良くなること	4.552	1.181
Q 1_7	施設で宿泊すること	4.651	1.469
Q 1_8	大人である利用者に対して支援すること	5.599	0.941
Q 1_9	実習中、自分の体調を管理すること	4.314	1.309
Q 1_10	実習中、早出遅番等のスケジュールに自分の生活のリズムをあわせること	4.291	1.409
Q 1_11	実習中、施設の食事を摂ること	3.308	1.464
Q 1_12	実習日誌を書くこと	5.105	1.233
Q 1_13	実習中、1人になる時間・空間がないこと	4.343	1.403
Q 1_14	「障害の原因や症状」に関する自分の知識の程度	5.907	0.832
Q 1_15	「施設」に関する自分の知識の程度	5.919	0.783
Q 1_16	「施設で働く福祉専門職」に関する自分の知識の程度	5.977	0.772
Q 1_17	実習の出来について施設側に評価を受けること	5.337	1.061
Q 1_18	施設の職員と会話をしたり、休憩時間を一緒に過ごすこと	4.279	1.281
Q 1_19	10日間連続して実習に取り組むこと	4.779	1.288
Q 1_20	指導員の考えが納得できないときに、自分の思っていることを伝えること	4.919	1.100
Q 1_21	重複障害のない知的障害児・者に対応すること	5.203	1.020
Q 1_22	自閉症を伴う知的障害者児・者に対応すること	5.314	1.006
Q 1_23	男性の障害者に支援を行うこと	5.314	1.152

Table 2 「経験」の質問項目の平均と標準偏差

(N = 172)

	質 問 項 目	M	S.D
Q 3_1	学校や日常場面で障害児・者に手助け等をしたことがある	3.227	1.135
Q 3_2	今まで、障害児・者と交流したことがある	3.866	0.764
Q 3_3	他者が障害児・者をからかったり、いじめている場面を見たことがある	2.785	1.212
Q 3_4	ボランティアとして障害児・者に継続して支援を行ったことがある	1.913	1.213
Q 3_5	障害児・者の行動等に接して、感動したことがある	3.192	1.151
Q 3_6	障害児・者をテーマとした本、テレビ番組、映画等を読んだり見たことがある	4.163	0.673
Q 3_7	他者の障害児・者への対応を見て、感動したことがある	3.512	1.034
Q 3_8	今まで、障害児・者施設を訪問したことがある	2.326	1.434

Ⅲ 結果

回収率は96.9%で、分析は、回答に不備のあったものを除く172名を対象とした。

1. 「障害者施設実習に対する不安」に関する質問の結果 (Table 1)

全項目の平均点は5.027であり、今回取り上げた質問項目に関しては全般的に不安を感じる傾向にある。各質問項目をみると、より不安が強い項目は「Q 1_16.『施設で働く福祉専門職』に関する自分の知識の程度」(5.977), 「Q 1_15.

『施設』に関する自分の知識の程度」(5.919), 「Q1_14.『障害の原因や症状』に関する自分の知識の程度」(5.907)など、障害や施設などの「知識」に関するものである。一方、もっとも不安が弱い項目は「Q1_11. 実習中、施設の食事を摂ること」(3.308)であり、「Q1_18. 施設の職員と会話をしたり、休憩時間を一緒に過ごすこと」(4.279), 「Q1_10. 実習中、早出遅番等のスケジュールに自分の生活のリズムをあわせること」(4.291), 「Q1_9. 実習中、自分の体調を管理すること」(4.314), 「Q1_13. 実習中、1人になる時間・空間がないこと」(4.343)など、実習中の生活面に関係する項目、体調管理に関するものが続く。また、標準偏差が大きいものは「Q1_7. 施設で宿泊すること」(1.496)や「Q1_11. 実習中、施設の食事を摂ること」(1.464)などであり、他の項目に比べこれらは不安の程度がばらつきやすいことがわかる。逆に、標準偏差が小さいものは「Q1_16. 『施設で働く福祉専門職』に関する自分の知識の程度」(0.772), 「Q1_15. 『施設』に関する自分の知識の程度」(0.783)など「施設」に関連する項目である。知識に関しては、得点および標準偏差から、学生全般が不安に感じている項目であることがわかる。

なお、自由記述欄には2名が記入したが、内容は設定した項目と重複するものであった。

2. 「障害児・者との関わり等の経験」に関する質問の結果 (Table 1, 2)

全項目の平均点は3.123であり得点中央値に近い結果となった。しかし、各質問項目をみると得点に偏りのある項目が多いことがわかる。経験頻度がもっとも高い項目は「Q3_6. 障害児・者をテーマとした本、テレビ番組、映画等を読んだり、みたことがある」(4.163)であり、次いで「Q3_2. 今まで、障害児・者と交流したことがある」(3.866)となる。この2項目については、経験が「全くない」、「あまりない」と回答した者はそれぞれ1割程度であり、ほとんどの学生は何らかの経験があるといえる。逆に、もっとも得点が低いものは「Q3_4. ボランティアとして障害児・者に継続して支援を

行ったことがある」(1.963), 「Q3_8. 今まで、障害児・者施設を訪問したことがある」(2.326)である。この2項目では、経験が「全くない」学生がそれぞれ約半数を占めている。

3. 「施設保育士の希望」に関する質問の結果

施設保育士に強い関心を示す学生は少ないものの、関心を持っている学生(「関心がある」、「少し関心がある」と回答した者、それぞれN=13, N=52)と関心がない学生(「あまり関心がない」、「全く関心がない」と回答した者、それぞれN=50, N=22)の割合は、ほぼ同程度であった。

4. 「障害者施設実習に対する不安」の因子分析 (Table 3)

「障害者施設実習に対する不安」に関する質問項目の得点を用いて、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値1以上を基準として因子数を決定し、5因子を抽出した。抽出した因子について、因子負荷量0.400以上の項目により解釈を行った。第1因子は「Q1_22. 自閉症を伴う知的障害児・者に対応すること」、「Q1_23. 男性の障害者に支援を行うこと」、「Q1_21. 重複障害のない知的障害児・者に対応すること」など5項目が所属している。内容をみると、実習において対応・支援する対象である利用者の属性(自閉症、知的障害、男性、大人)についての不安であると考えられた。したがって、第1因子を「対象者に関する不安」とした。この第1因子の寄与率は32%を越えている。第2因子は「Q1_15. 『施設』に関する自分の知識の程度」、「Q1_16. 『施設で働く福祉専門職』に関する自分の知識の程度」、「Q1_14. 『障害の原因や症状』に関する自分の知識の程度」の3項目で構成されている。いずれも障害や施設に関連する知識についての不安であることから、第2因子を障害等の「知識に関する不安」と命名した。第3因子は「Q1_12. 実習日誌を書くこと」、「Q1_17. 実習の出来について施設側に評価を受けること」、「Q1_18. 施設の職員と会話をしたり、休憩時間を一緒に過ごすこと」、「Q1_19. 10日間連続して実習に取り組むこと」、「Q1_20.

Table 3 「施設実習に対する不安」の因子分析

質 問 項 目	因 子					共通性
	1	2	3	4	5	
Q1_22 自閉症を伴う知的障害者児・者に対応すること	0.93	0.06	-0.11	-0.04	-0.06	0.707
Q1_23 男性の障害者に支援を行うこと	0.72	-0.04	0.02	0.05	-0.09	0.513
Q1_21 重複障害のない知的障害児・者に対応すること	0.70	0.13	0.00	0.08	-0.08	0.600
Q1_6 利用者と仲良くなること	0.45	-0.15	0.11	0.17	0.16	0.484
Q1_8 大人である利用者に対して支援すること	0.43	0.15	0.08	0.19	-0.07	0.441
Q1_15 「施設」に関する自分の知識の程度	0.03	0.96	0.01	-0.05	0.04	0.918
Q1_16 「施設で働く福祉専門職」に関する自分の知識の程度	0.02	0.90	0.01	-0.02	0.07	0.847
Q1_14 「障害の原因や症状」に関する自分の知識の程度	0.03	0.86	0.01	0.06	-0.05	0.790
Q1_12 実習日誌を書くこと	-0.23	0.06	0.82	0.16	-0.09	0.569
Q1_17 実習の出来について施設側に評価を受けること	-0.06	0.10	0.73	0.06	-0.12	0.475
Q1_18 施設の職員と会話をしたり、休憩時間を一緒に過ごすこと	0.25	-0.10	0.63	-0.19	-0.06	0.437
Q1_19 10日間連続して実習に取り組むこと	0.10	0.03	0.63	-0.14	0.13	0.531
Q1_20 指導員の考えが納得できないときに、自分の思っていることを伝えること	-0.04	-0.05	0.49	0.12	0.02	0.279
Q1_13 実習中、1人になる時間・空間がないこと	0.07	0.04	0.41	-0.14	0.31	0.421
Q1_5 利用者に対して、してはいけないことを注意すること	0.02	-0.03	0.00	0.80	-0.03	0.624
Q1_4 利用者に対して、してほしいことを指示すること	0.13	-0.04	0.02	0.75	-0.06	0.669
Q1_1 利用者のやりたいこと、やりたくないことなどの意思を把握すること	0.09	0.15	-0.05	0.48	0.11	0.408
Q1_9 実習中、自分の体調を管理すること	-0.03	-0.02	-0.11	-0.06	0.91	0.668
Q1_10 実習中、早出遅番等のスケジュールに自分の生活のリズムをあわせること	-0.20	0.14	0.00	0.13	0.75	0.560
Q1_7 施設で宿泊すること	0.02	-0.10	0.36	0.07	0.42	0.535
Q1_2 利用者に対する食事や更衣などの生活上の世話をすること	0.26	-0.01	-0.03	0.29	0.03	0.236
Q1_3 利用者と一緒に余暇時間を過ごすこと	0.36	-0.09	0.07	0.26	0.21	0.486
Q1_11 実習中、施設の食事を摂ること	0.31	0.03	0.07	-0.11	0.35	0.321
寄与率 (%)	32.235	9.409	6.877	3.031	2.879	54.432
α 係数	0.83	0.94	0.80	0.77	0.76	(累積)

指導員の考えが納得できないときに、自分の思っていることを伝えること」,「Q1_13. 実習中、1人になる時間・空間がないこと」など6項目で構成されている。内容をみると、実習日誌作成や評価を受けることなどの実習生であることから生じる義務、実習生活に関すること、職員とのコミュニケーションなど、いくつかの領域の不安が複合して構成されているように思われる。ここでは、因子負荷量が高い項目(Q1_12, Q1_17)から、「実習生としての義務に関する不安」とした。第4因子は、「Q1_5. 利用者に対して、してはいけないことを注意すること」,「Q1_4. 利用者に対して、してほし

いことを指示すること」,「Q1_1. 利用者のやりたいこと、やりたくないことなどの意思を把握すること」の3項目が所属している。いずれも利用者へ働きかけることについての不安に関連していると判断し、第4因子を「働きかけに関する不安」とした。第5因子は「Q1_9. 実習中、自分の体調を管理すること」など3項目で構成されており、「体調管理に関する不安」とした。なお、Q1_2, 3, 11についてはいずれの因子に対しても負荷量は低い。5因子それぞれの α 係数は0.94(第2因子)~0.76(第5因子)を示しており、いずれも内的整合性は保たれていると考えられた。

Table 4 経験間の相関

	Q3_1	Q3_2	Q3_3	Q3_4	Q3_5	Q3_6	Q3_7	Q3_8
Q3_1		0.514***	0.342***	0.108	0.307***	0.166*	0.229**	0.102
Q3_2			0.247**	0.095	0.189*	0.304***	0.124	0.173*
Q3_3				-0.041	0.135	0.079	0.149	0.027
Q3_4					0.351***	0.103	0.264***	0.258**
Q3_5						0.201**	0.369***	0.050
Q3_6							0.392***	0.108
Q3_7								0.041

*P<0.05 **P<0.01 ***P<0.001

Table 5 経験・施設保育士への関心の程度と不安との相関

不安因子	経験の質問項目								施設保育士への関心
	Q3_1	Q3_2	Q3_3	Q3_4	Q3_5	Q3_6	Q3_7	Q3_8	Q4
第1因子	-0.280***	-0.224**	-0.190*	-0.262**	-0.295***	-0.174*	-0.248**	-0.059	-0.049
第2因子	-0.125	-0.050	-0.182*	-0.095	-0.131	-0.042	-0.138	-0.088	0.013
第3因子	-0.175*	-0.214**	-0.058	-0.031	-0.185*	-0.194*	-0.214**	-0.001	-0.077
第4因子	-0.251**	-0.227**	-0.156*	-0.216**	-0.193*	-0.114	-0.251**	-0.076	-0.020
第5因子	-0.041	-0.118	0.022	-0.035	-0.036	-0.184*	-0.186*	0.011	-0.101

*P<0.05 **P<0.01 ***P<0.001

5. 「障害者施設実習に対する不安」と経験等との関係の分析

(1) 経験間の相関 (Table 4)

経験に関する8項目間の相関関係 (Table 4) をみると多くの項目間に有意な相関が認められる。障害者に関わる機会について注目すると、「Q3_1. 日常場面等での手助け等の経験」、「Q3_2. 障害児・者との交流経験」と「Q3_6. TV等の視聴経験」には、それぞれ有意な正の相関がある。したがって、障害のある人と関わる機会の多い人は、直接的・間接的かに関わらず、さまざまな形で障害者との接触機会をもつ傾向があり、逆に、関わる経験が少ない人はそれとは反対の傾向を示すといえる。また、そうした機会と障害者の行動や障害者に対する他者の行動に感動するような体験 (Q3_5, 7), “からかい” などの目撃経験 (Q3_3) にも有意な正の相関が認められる。一方、ボランティア経験 (Q3_4) は、障害者に関わる機会に関係するQ3_1, 2, 6 との関係や、“からかい”

などの目撃経験 (Q3_3) との関係は認められない。したがって、ボランティア経験は、Q3_1, 2, 6 などとはやや異なったものであるととらえられる。また、施設を訪問した経験 (Q3_8) は他の項目との関連は弱く、ボランティア経験 (Q3_4) と交流経験 (Q3_2) の2つに関してのみ有意な正の相関関係が認められた。

(2) 不安と経験の相関 (Table 5)

経験の頻度と不安の強さは全般に負の相関を示しており、経験が多い場合には不安が低減する傾向がある。不安因子別に経験との関係を見ると、第1因子 (対象者に関する不安)、第4因子 (働きかけに関する不安) は、いずれも経験の多くの項目と負の相関関係があるが、そのうち6項目 (Q3_1, Q3_2, Q3_3, Q3_4, Q3_5, Q3_7) は両群に共通しており、類似した傾向を示している。第3因子 (実習生としての義務に関する不安) も経験の5項目と負の相関関係が認められ、第1, 4因子に類似した傾向が示されている。第3因子では、特に、

Table 6 不安を従属変数とする重回帰分析 (Stepwise法)

	F 1 : 対象者	F 2 : 知識	F 3 : 義務	F 4 : 働きかけ	F 5 : 体調管理
Q 3 _ 1 日常場面での手助け	0.209**			0.197**	
Q 3 _ 2 交流			0.191*		
Q 3 _ 3 “からかい” 目撃		0.182**			
Q 3 _ 4 ボランティア	0.181*			0.151*	
Q 3 _ 5 障害者感動	0.167*				
Q 3 _ 6 TV等視聴					
Q 3 _ 7 他者感動			0.190*	0.166*	0.186*
Q 3 _ 8 施設訪問					
R ²	0.155***	0.033*	0.081**	0.124***	0.035*
自由度調整済みR ²	0.140	0.028	0.070	0.108	0.029

*P<0.05 **P<0.01 ***P<0.001

交流の経験 (Q 3 _ 2), 他者の障害者に対する行動に対して感動した経験 (Q 3 _ 7) との関係が強い。一方, 第 2 因子 (知識に関する不安), 第 5 因子 (体調管理に関する不安) については, 経験との関係は, 他の因子に比べ弱い傾向にある。経験の項目別にみると, “からかい” 目撃経験 (Q 3 _ 3), TVの視聴等による間接的な関わりの経験 (Q 3 _ 6) は他の項目に比べ不安との関係は弱く, また, 施設訪問経験 (Q 3 _ 8) は, 不安のどの因子とも関係が認められなかった。

(3) 経験が不安に及ぼす影響 (重回帰分析)

障害のある人と関わった経験のうち, どのような経験が実習不安にどの程度の影響を及ぼしているのかを分析するため, 不安の各因子を従属変数, Q 3 _ 1 ~ Q 3 _ 8 の経験を独立変数とする重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った。不安は因子得点を, 経験は項目得点を分析に用いたが, 経験に関しては, 結果の解釈に混乱が生じないように項目得点を逆転 (5 点 = 1 点 ~ 1 点 = 5 点) した上で利用した。分析の結果 (Table 6), 第 1 因子 (対象者に関する不安) に関しては, 有意な標準偏回帰係数を示すものは「Q 3 _ 1. 日常場面等での手助け等の経験」, 「Q 3 _ 4. ボランティア経験」であり, 障害者に支援を行った経験がこの不安と関係すると推測される。また, 障害者自身の行動に対して感動した経験 (Q 3 _ 5) との関連も示されている。第 4 因子

(働きかけに関する不安) も同様に, Q 3 _ 1, Q 3 _ 4 の障害者に支援を行った経験が不安の増減に関係すると考えられるが, 第 1 因子の不安と異なり, 「Q 3 _ 7. 他者の障害者の行動に感動した経験」との関係が強いことがわかる。第 3 因子 (実習生としての義務に関する不安) では, 「Q 3 _ 2. 交流の経験」, 「Q 3 _ 7. 他者の障害者の行動に感動した経験」と有意な関係が認められ, 実際に支援を行った経験より交流や他者の行動に関することが影響を与えると考えられる。なお, 第 2 因子 (知識に関する不安), 第 5 因子 (体調管理に関する不安) については, 第 2 因子が「Q 3 _ 3. “からかい” 目撃経験」, 第 5 因子が「Q 3 _ 7. 他者の障害者の行動に感動した経験」と, 有意な関係が認められたのはそれぞれ 1 項目のみであった。項目別にみると, 「Q 3 _ 7. 他者の障害者の行動に感動した経験」がもっとも多く因子と関係しており, 次に Q 3 _ 1, Q 3 _ 4 の障害者に支援を行った経験が続く。逆に, 「Q 3 _ 6. TV等の視聴経験」, 「Q 3 _ 8. 施設訪問の経験」は因子と有意な関係は認められなかった。

(4) 「障害者施設実習に対する不安」と施設保育士に対する関心の程度との関係

施設保育士に対する関心の程度を問う設問 (Q 3 _ 8) の得点と不安因子の因子得点との相関をみたが, 有意な相関は認められなかった (Table 5)。また, 施設保育士の関心について,

「1. 全く関心がない」、「2. あまり関心がない」と答えた者を低関心群 (N=72), 「4. 少し関心がある」、「5. 関心がある」とした者を高関心群 (N=65) とし、2群間での不安因子1～5の因子得点の差について、分散分析により検討した。この結果、いずれの因子に関しても両群間の有意な差は認められなかった。

IV 考察

1. 「障害者施設実習に対する不安」の構造と保育所実習における不安との異同について

保育士資格の取得を希望する学生の障害者施設実習に対する不安は5因子構造であった。因子は、実習において支援の対象となる者の属性(障害, 成人, 男性など)に関して持つ不安, つまり、「対象者に関する不安」(第1因子), 障害や施設についての「知識に関する不安」(第2因子), 実習生として施設で生活し, 日誌を書く, 評価を受けるといった「実習生の義務に関する不安」(第3因子), 対象者(障害者)の意思を把握し, 支援を行うといった「働きかけに関する不安」(第4因子), 宿泊実習を継続し, 早出・遅出などに対応していく上での「体調管理に関する不安」(第5因子)であった。保育所実習に伴って生じる不安と比較すると, もっとも特徴的な相違は, 支援対象者に関しての不安(第1因子), 障害に関する知識についての不安(第2因子)が存在するという点である。保育所実習の不安に関する先行研究では, 実習生が支援対象者(この場合は「子ども」)に関して持つ不安は, 子どもとのコミュニケーションや子どもへの働きかけが適切にできるかというものが中心であり, 知識に関係する不安も, 保育技能や部分・全日実習の遂行のための準備, 子どもの発達過程に関する知識などについての不安である。障害者施設実習にみられる第1, 2因子の不安は, 支援対象者の属性に関係する不安であり, 保育所実習の場合とは明らかに性質が異なる。したがって, これらは, 保育士養成を目的とした障害者施設での実習に際して生じる特有の不安であると指摘できる。こうした因子が抽出されるのは, 障害者施設実習は保育

士が一般に対象とする児童とは異なる属性を持つ人たちと関わる実習であることに起因するといえよう。なお, 児童養護施設等の児童福祉施設で行われる施設実習についての先行研究⁷⁾では, 不安の因子構造についての検討は行われていないものの, 対象児や施設に関係した不安が生じることが指摘されている。詳細な分析は今後の課題となるが, 学生が児童養護施設等で関わる児童を保育所の児童とは異なる属性をもつ児であると認識する場合には, 障害者施設実習でみられた「対象者の属性」に関する不安や, 対象に係る「知識」についての不安などが存在するといった, 類似した因子構造となる可能性があると思われる。

そのほかの第3, 第4, 第5因子は, 保育所実習に対する不安の先行研究においても同様の因子が認められる。したがって, 第1, 2因子以外の不安は, 実習先の種類・性格に関わらず保育士養成を目的とした実習において共通に生じる不安であると考えられる。なお, 先行研究⁷⁾で指摘された宿泊を伴う実習であることについての不安は, 体調管理や生活リズムの不安と類似した不安として第5因子に所属している。また, 項目得点平均と標準偏差からみて不安としては強いとはいえず, 個人差が生じやすいものであると思われる。

2. 「障害者施設実習に対する不安」と経験との関係について

経験と不安の相関関係全体の傾向として, 経験が多いほど不安が少ないという負の相関が認められ, いくつかの経験が不安の増減に有意に寄与していることがわかった。

不安の内容と経験との関係に注目すると, 第1因子と第4因子は経験との相関の様相が類似する傾向にある。つまり, 対象者に関して(第1因子), 働きかける(第4因子)というそれぞれの不安は, 類似した経験の影響によって増減すると考えられる。重回帰分析の結果, 共通して影響を与える経験は, 実際に障害のある人に支援した体験(Q3_1, Q3_4)であった。この結果自体はきわめて自然なことであると考えられるが, Q3_1と相関が認められる交流の

経験やTVの視聴等によって間接的に障害者と関わった経験は、不安には有意な影響を与えていない。障害者施設実習の事前指導などでも、これらの経験ができるような機会を設けることがあると思われる。しかし、今回の結果は、そうした交流等の経験は、第1、4因子の不安の軽減には直接寄与するものではないことを示している。次に、第1因子と第4因子の相違は、第1因子が障害者自身に対して感動した経験(Q3_5)との関連が認められるのに対して、第4因子は「Q3_7. 他者の障害者に対する行動に感動した経験」と有意な関係があるという点であった。障害者の行動に感動した経験によって障害者に対する肯定的な意識や態度が形成されるであろうし、他者の障害者に対する行動に感動した経験によって障害者に働きかける方法を理解し、働きかけようとする意欲が向上すると考えることができる。そのため、これらの経験が多いことが不安の低減に関係するといえる。そうしたとらえ方からみれば、この結果もごく当然のことであると思われる。ただ、他者の障害者に対する行動に感動した経験については、単に適切な働きかけの方法を観察し、学ぶという経験ではなく、「感動」した体験である。このことを考えると、障害者の行動に感動した経験と同様に、障害者に対する意識や態度そのものに肯定的な変化が生じている可能性もある。その意識・態度の肯定的な変化が障害者に働きかけることについての不安を低減させるという推測である。感動した経験とは、障害者と関わった経験について、その経験の「質」を表現したものにとらえることができよう。障害者観に関する研究では、こうした「体験の質」は、障害者に対する意識・態度の形成に意味を持つこと、また、よい「体験の質」は障害者観を肯定的に変えることが示唆されている^{3),4)}。今回の分析では、他者の障害者に対する行動に感動した経験は5因子中3因子の不安の低減に寄与している。このことは、そうした経験は働きかけ方の習得をしたという経験以上の体験であったことを示唆している。さらに、障害者や他者の行動に感動した体験を得られるような機会を意

図的に設けることによって、第1、4因子の不安を軽減する可能性も窺える。たとえば、「Q3_5. 障害者自身に対して感動した経験」は「Q3_2. 交流の経験」と、「Q3_7. 他者の障害者の行動に感動した経験」は「Q3_6. TV等の視聴経験」や「Q3_8. 施設訪問」と、それぞれ有意な相関がある。つまり、それらの経験に伴って感動を体験していると考えられる。したがって、事前指導などでTV等の視聴や施設訪問の機会を設ける際に、感動する体験が得られるような工夫ができれば、不安の低減につながる可能性がある。交流の経験やTV等の視聴経験、施設訪問などは、その経験自体は第1、4因子の不安軽減に寄与するものではないが、その経験の質を高めることによって不安軽減の効果を期待できると思われる。

第3因子では、「Q3_2. 交流の経験」、「Q3_7. 他者の障害者の行動に感動した経験」と有意な関係が認められた。第3因子は、施設での実習生活や実習中に日誌を書くこと、実習生として評価を受けることなどの不安を表しており、第1、第4因子のような障害者と関わることについての不安とは異なるものである。このため、実際に支援を行った経験との関係は弱いと考えられる。したがって、Q3_2、Q3_7といった経験がこの不安の程度に影響を及ぼす理由は明確ではない。第3因子は、6項目が所属しており、いくつかの不安の要素が複合した因子であるととらえられるが、それが影響因との関係を解釈しにくくしているとも考えられる。寄与が認められる経験の一つに他者の障害者の行動に感動した経験があることから、第4因子の場合と同様に障害者に対する意識・態度の肯定的変容がみられ、そのことが不安の低減に関係しているという可能性はあろう。たとえば、施設や施設で過ごすことに対する不安が低減されるということである。第5因子(体調管理の不安)も他者の障害者の行動に感動した経験が寄与しているが、この場合も同様に、施設や施設で過ごすことに対する不安の低減があり、それが体調管理の不安の軽減に関係しているかもしれない。しかしながら、第3因子をはじめ、

第2因子(知識)、第5因子と経験との関係は、さらに検証していく必要がある。特に、第2、5因子に関しては、重回帰分析の決定係数がきわめて小さいことから、経験の項目の精査・再構成が必要となろう。

なお、障害に関係する知識については、先行研究では障害者に対する意識・態度の重要な形成要因ととらえられている。たとえば、知識の獲得は態度の変化に関与すること、さらに知識は経験と結合することによって態度変容に大きな影響を与えること³⁾が指摘されている。今回、調査対象となった学生は、項目得点をみるとQ3_1、Q3_2、Q3_6などの経験は多く持っている。しかし、同時に知識に関する不安が強い。このような場合には、知識を投与することによって障害者に対する意識・態度がさらに肯定的に変容する可能性が窺われる。さらにその結果として、実習に対する不安の軽減が期待できると思われる。

謝 辞

調査に協力して頂いた学生の皆さんに記して感謝致します。

文 献

- 1) 原信夫(2006)「保育実習の不安について」清和大学短期大学部紀要, (35), 79-89
- 2) 長谷部比呂美(2007)「保育実習に関する学生の意識について—実習不安を中心として—」淑徳短期大学研究紀要, 第46号, 81-96
- 3) 川間健之介(1996)「障害を持つ人に対する態度—研究の現状と課題—」特殊教育学研究, 34(2), 59-68.
- 4) 倉本義則(2007)「統合保育に対する意識・態度の類似度による分類と影響因の検討～保育系女子大生を対象に～」京都女子大学発達教育学研究, 第3号, 11-21
- 5) 杉山喜美恵(2002)「教育実習事前指導のあり方について2. 教育実習に対する学生の不安要因」東海女子短期大学紀要, 28, 167-177
- 6) 高橋秀典・島崎保・井上光一・森脇裕美子・中磯子, 田中麻貴(2007)「保育実習前の実習生の不安要因」日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 183
- 7) 田中チカ子・菅田栄子(1994)「施設実習に対する学生の意識(第3報)—事前の不安への対策—」松山東雲短期大学紀要, vol. 25, 113-125
- 8) 碓氷ゆかり(2006)「幼稚園教育実習における学生の不安に関する研究(1)幼稚園教育実習不安尺度作成の試み」聖和大学論集, A・B, 教育学系・人文学系, No. 34, 15-23